

Title	下村寅太郎著, 「アシジの聖フランシス」
Sub Title	St. Francis of Assisi (アシジの聖フランシス), by Torataro Shimomura (下村寅太郎)
Author	坂口, 昂吉(Sakaguchi, Kokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1966
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.39, No.2 (1966. 9) ,p.139(275)- 141(277)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660900-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

理と方法が近世史研究の現状が持つ空白をうめる積極的な意味を持つと同時に、幕藩社会の構造・機能分析への寄与の限界をあわせ持つところに、本書に対する評価は自ら定るであろう。著者のかかる論理は縷々述べたように、實に本書の各章において見事に貫徹しているからである。

下村寅太郎著

「アシジの聖フランシス」

昭和四十年
南窓社刊

坂 口 鼎 吉

アシジの聖フランシスほど世界に弘く親しまれている人物は史上に稀であろう。わが国でも大正年代に白樺派の作家たちを中心にしてこの聖者への関心が昂まつたことがある。美しい自然の中に自由に遊びながら、しかも田舎欲する所に従つて矩を踰えぬ聖者の姿が当時の人心をひらいたのである。P. Sabatier の伝記や、「完全の鑑」、「小さき花」の翻訳が行われたのもその頃である。また近年にも J. Jørgensen の伝記の翻訳が行われるなど、その関心が失われてしまつたわけではない。

しかし、これだけの人気を呼んだことがありながら、聖フラン

シスの学問的研究書が一冊もないということは、奇異の感をいだかれるをえない。著者もまた、本書を「専門的研究に値しない」

とのべておられる。実際これは厳密な意味での論証をねらうとする専門書ではない。史料の吟味、聖者の生涯と弟子たち、わらにその理想の把握と迫つていく章節の体系的整理こそあれ、行文は流れるように絞し去り絞し来る一種の隨想の如くである。ただ單なる隨想と異なるところは、筆致のどこかに妙な熱っぽさを感じられることである。だがそれにもまして注目すべきは、まるで自由な感想と思われる一句一句に、なみなみならぬ學問的裏づけがうかがえることである。それは著者自らいわれる「一応の學問的準備」どころではないのである。

著者が本書を執筆するにいたつた動機は、近年アシジを訪れたのが縁で聖フランシスの書を再読し、西洋風の良寛というような従来の印象とはおよそ違つたものを感じられたことである。それは、清貧に対する弟子たちの裏切りに痛憤するばかりか、内面的にも迷い悩み傷悴していく聖者の姿であつた。かの自然を讃美する新時代の曙光ともいべき「太陽の歌」ですらが、失明と聖痕の痛みのうちに死の訪れを待つ、肉体的・精神的絶望のどん底から湧き出た宗教的歡喜の作であつた。したがつて著者は、Sabatier なかんずく H. Thode が指摘したような、聖者の強烈な個性がルネサンス文化に与えた影響を一概に否定するわけではないが、聖者自身に關する限り自然神秘主義・汎神論・浪漫主義の如きものとは無関係であると主張する。

では聖フランシスの理想の基本的特色とは何であろうか。著者はこれを *Testamentum* に一貫する「主が与え賜った」(Do-

minus dedit) の精神であるところ。それは、教義でも神学でも禁欲でもなく、眞ちいかなる人間的・自然的媒介によるのでもなく、神より聖者に直接啓示されたものであつた。そして全く彼の内経験に依存するといふ意味で、一切の戒律化・制度化を不可能とする性格をもつていた。ひととみられる著者の聖フランシス像は、十六世紀の宗教改革者に相似した所をもち、その点で Sabatier 或は E. Benz の見解に近いと言えよう。

もちろん、かかる聖フランシス觀は、Father Cuthbert, J. Jörgensen, H. Felder, K. Esser を始め多くの批判にさらわれてしまだ。しかし著者はやれらのすべてを考慮にいれた上で主張しているのである。したがつて史料操作においても聖フランシスの自筆文書、ショラーのトマスの第一伝記・第二伝記・第三伝記（奇蹟の書）の如くより根本的なものを基礎とした上で、レオ歴史綱を援用すゆところへ慎重さがみられる。ただ自筆文書の中で Testamentum を過度に重視したり、レオ史料に一致するのみをよのむい諸伝記の中から拾い出してくるという感なきにしもあるずである。だがこれも著者の次の言葉を考えれば自説と矛盾する多くの材料を意識した上でのことと曉われる。即ち、「フランシスはあくまでも中世的であり、カトリック的であつても、しかも我々にとっての関心はなお克くこれを越えていふところにあり、我々が抑々フランシスに関心をもつことがその証左であるところことが出来る」（110頁）と。この言葉を筆者なりに解釈するといふことが出来る。

か。確かに聖フランシスが外面的には從來の慣例に従つて客観的な聖職秩序への畏敬に生きたことは認めてもよい。しかしそれは、彼が便宜上まとつていたとしてもよい外衣にすぎぬ。彼の本質は、あくまで彼個人の内的な宗教体験にあつたのであると。この説の如く、聖フランシスの中に從來の教会的伝統を超える新しいが潜んでいたことは否定できない。しかし教会と聖職秩序は、彼にとっていつでも脱ぎ捨てうる外衣であつたろうか。聖フランシスの清貧は、著者も強調されるようにクリスチの貧しさではなく、貧しきクリスチの隨順であつた。抽象的理念ではなく、地上におけるクリスチの具体的行動に一致することであつた。だがここまでの如きは、聖体の祕蹟への愛と、それとはそのクリストの肉身への愛は、聖体の祕蹟への愛と、それとはその祕蹟の保管者である眼に見える教會への愛にむつながつてゐるのではなかろうか。このことはなにも Verba admonitions や De reverentia corporis Domini et de munditia altaris 等に拠るが、著者の重視され Testamentum から明瞭にうかがわれるはずである。結局聖フランシスの教會と聖職秩序に対する愛は、彼における古き残滓ではなく、新しい内的体験と不可分離であり、むしろその流出ともいふべきではあるまい。

第二に問題にしたいのは、フランシスの変質過程についてである。著者は R. B. Brooke に従い、聖フランシスの精神を変質させたのは、ウローノの陰謀でもヒリアスの裏切りでもなく、いわゆる ministri の一派であるとされる。確かに情勢の変化に適応して使徒職と學問の進展につとめたのが彼らであつたこ

とは事実である。しかし彼らを清貧緩和の張本人とする著者の主張には疑問がある。彼らが可能な限りにおいて清貧の遵守につとめていたことは、その指導者フェイヴァシャムのハイモが、原精神にもつとも忠実な英國管区の代表者であつたことからも明かであろう。Brooke も、彼らを後の会則緩守派に直接つながるものとは考えていないようと思われる。

第三に学問に関する問題をとりあげたい。著者は、聖フランシスが徹底的に反学問的であつたといわれる。確かに、学問をするために、今日では想像できぬほどの財力を要した当時、絶対的清貧を唱える聖者の学問に対する態度が厳格極まるものであつたのは当然である。またその意味で、聖フランシスは使徒職、特に聖書の説教のために学問することを推奨したという H. Felder の説を単純に肯定することもできないと思われる。しかし反面、聖者が学問それ自体を否定したということを、テクストに基いて立証するのも至難であろう。彼が非難しているのは、学問に附隨する富とか傲りとかの夾雜物であつて、学問そのものではないようと思われるるのである。

第四に、聖フランシスの精神とフランシスコ会の問題に移りたい。著者は、オックスフォードのフランシスコ会学派を、聖者の体験的直観主義を体し、経験主義と実験尊重の学風を生みだしたとして称揚される。この点について異論はない。しかし、ボナヴェントゥーラを中心とするアウグスチヌス主義者たちを、聖フランシスの精神とは何ら関係なきスコラ的思弁を弄するものといわ

れるのは、いかなる根拠があつてのことであろうか。E. Gilson, E. Longpre, A. Pegis による両聖者の精神的つながりを示す研究によるまでもない。單にスコラ学的用語法を用いるという意味でなら、スコトウスやオッカムはボナヴェントゥーラをはるかにしのいでいるではないか。またその論理の帰結についていっても、確かにボナヴェントゥーラは実験的帰納法の創造者ではないが、理性に対する愛の優位を説き、学問の人生からの遊離をあくまで拒否した点では、単純な信仰者としての聖フランシスの精神を体したものであるといえよう。著者は、ボナヴェントゥーラを折衷的アリストテレス主義者とする F. Van Steenberghe の説も援用しておられる。しかしこの学説は、彼の思想の素材的分析ですぐれているが、その全体を総合する精神の把握に欠けると評されていることを附言したい。

以上螳螂の斧の感あるも顧みず、いささか所感をのべさせて頂いたが、筆者はわが国において始めて聖フランシスに關する高度の学問的著述を手にしえた喜びを禁ずることができない。本書が廣く読まれ、これを契機としてますます研究が進展することを望むものである。